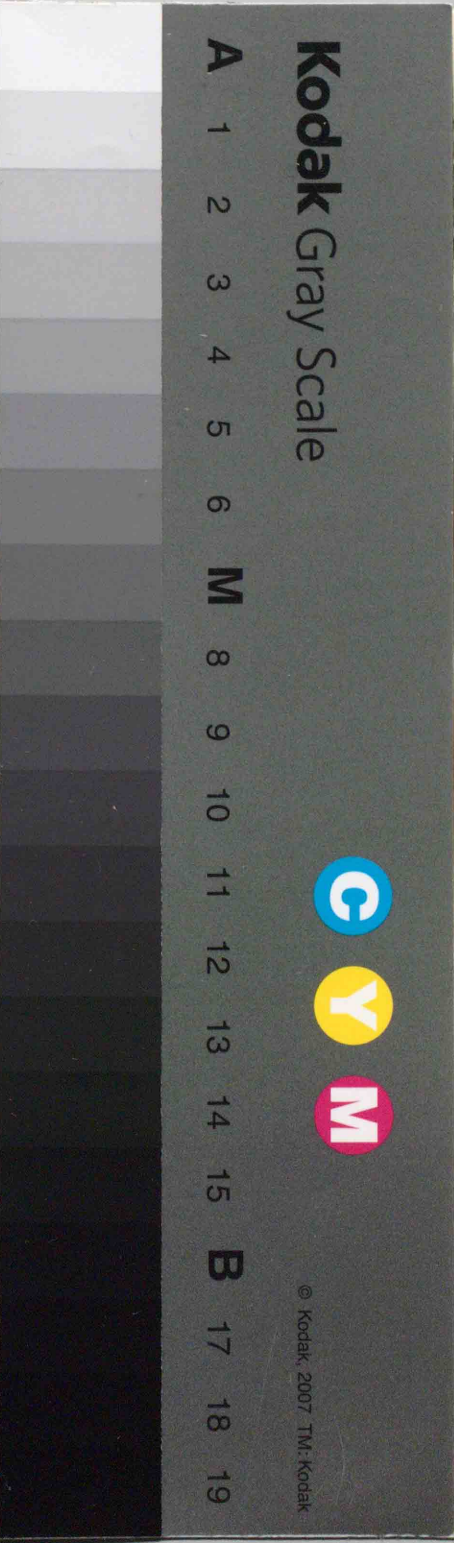
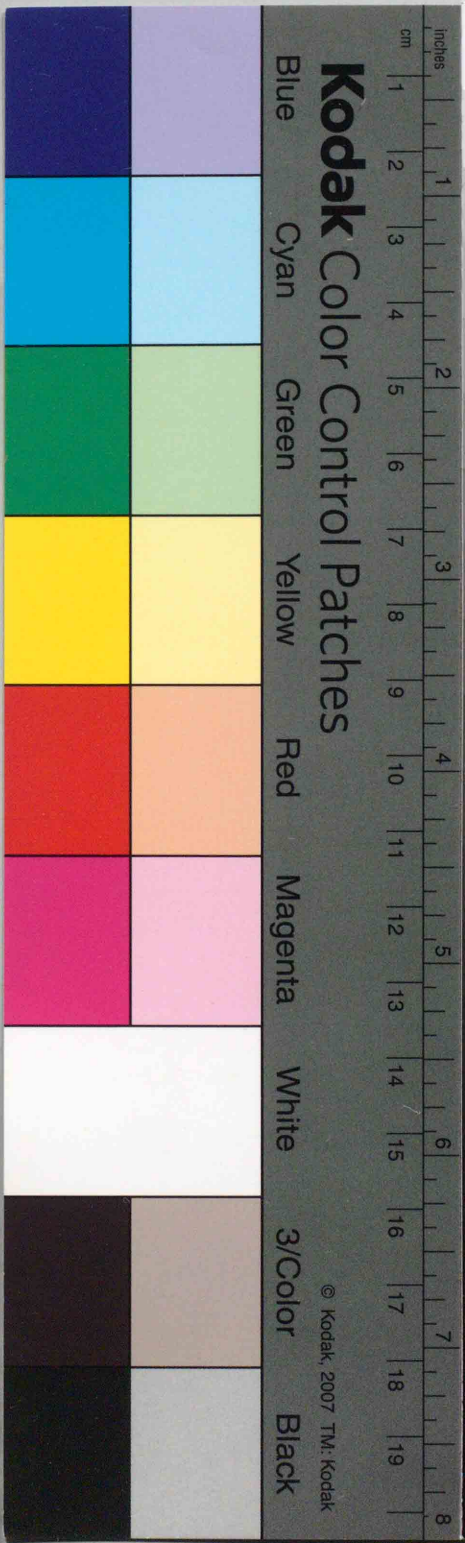


訂改
新撰實業讀本

卷三

教科書文庫
4
810
40-1917
2000081509



43346

教科書文庫

4
810
40-1917
20000 81509



資料室
中央図書館

教科書文庫
4
810
40-1917
2000081509

40
810
56

文學博士佐々政一編

改訂
新撰實業讀本

東京株式會社
明治書院

広島大学図書
2000081509



改訂
新撰實業讀本 卷三目次

- 一 明治天皇御製……………一
- 二 如何にして國家を愛すべきか……………四
竹越三又
- 金言(一)……………一
海峽論上
- 三 春の廣見……………一
沼及讀書
- 四 西國花便り……………一八
坪谷米武
- 一 吉野の花信……………一八
- 二 熊野落……………一九
- 三 芳山の落花……………二〇

目次

四 大和十津川の桃源境……………二二

金言(一)……………論議……………二三

五 巴里の五月……………島村藤村(平和巴里)……………二三

六 佛國人の節儉……………福本日南(現狀)……………二七

金言(二)……………三〇

七 捕鯨記上……………正見大造(捕鯨記)……………三〇

八 捕鯨記下……………三七

金言(三)……………四五

九 南洲遺訓……………西原南州……………四六

一〇 草とり……………植高直徳……………五〇

金言(四)……………五三

一一 武士道と實業……………那波洋平(高瀬日記)……………五四

一二 服従と獨立……………徳富蘇峰……………六〇

金言(五)……………孟子 論語……………六七

一三 心眼……………中村正造(西口立花編)……………六七

一四 成功狂……………徳富蘇峰……………七一

金言(六)……………史記 論語……………七五

一五 山田鋤く牛山車の牛……………幸田露伴(心のあと)……………七五

一六 乃木兄弟の水盃上……………碧瑠璃園(海軍大臣)……………七八

一七 乃木兄弟の水盃下……………八四

金言(七)……………(論語) 王荊……………九五

一八 死して惜しまるる人となれ……………嘉嘉納(五印)……………九五

一九	學窓より	友田宜剛の文	一〇二
	金言(九)	小野論議	一〇四
二〇	讀書	坪内逍遙	一〇四
二一	ことば	櫻庭皇村	一〇九
二二	蜀山人の盆燈籠	廣徳美塾幸年史	一一二
二三	洋學の由來	徳富蘇峯	一一九
二四	黄色人種の自覺	老子	一二三
	金言(一〇)	通子	一二八

卷三目次終

改訂新撰實業讀本卷三

一 明治天皇御製

歌

思ふことありのまにまに連ぬるが、

いとまなき世の慰めにして。

言の葉の誠の道を、月花の

もてあそびとは思はざらん。

子

言の葉の誠を
 (歌をよみよみ)
 教島
 大和の秋詞

うちつけ
（おきつけ）

る（商屋）

（おきつけ）

述懐

思ふこと

會得

（おきつけ）

思ふことうちつけにいふ幼子の

言葉はやがて歌にぞありける。

海邊霞

かぎりなき大海原の波の上に

たなびき渡る春がすみかな。

朝聞鶯

今朝はまたいづくの梅に宿るらん、

遠く聞ゆるうぐひすの聲。

風前花

春風の吹きのままにまにちりくるは、

いづこの庭の櫻なるらん。

述懐（思ふこと）

世の中は、

高き賤しき程程に

身を盡すこそ

つとめなりけれ。

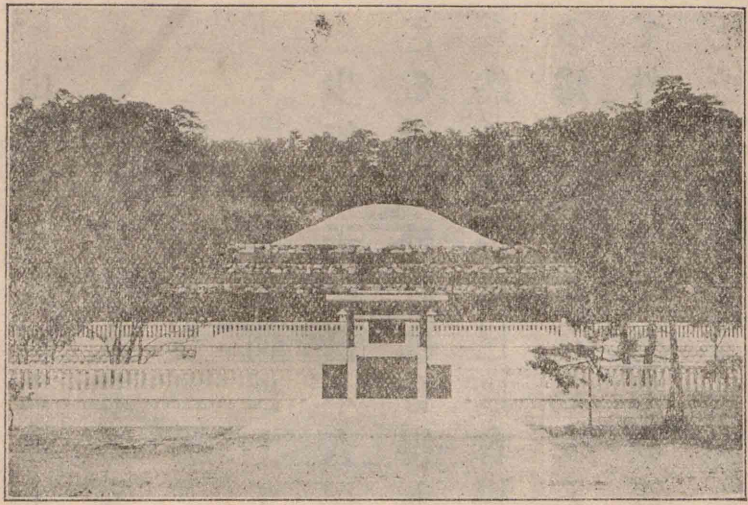
教育

よきをとり

あしきをすてて、外國に

おとらぬ國と

なすよしもがな。



桃山御殿

進みたる世にうまれたるうなるにも、

昔のことをまづ教へなん。
山をぬく人の力も、しきしまの
大和心ぞもとゐなるべき。

二 如何にして國家を愛すべきか

少年諸子よ、日本人民が日本國を愛せざるべからざる道理は既に會得したるか。

然り、我等は已に會得したり。我等は我が國が外敵の爲に侵されんとする場合には、あらゆる力を盡して外敵を防ぐべし。我等は之を以て我等の義務なりとなす。

道理
(道理)
所々一也

科号

予統より予理に研究する
即ち心算と大文の理を
予理に依りて認め

確證

口説か制定
ゆゑに
の極性

ゆか
(ゆか)

*
一六一九七

少年諸子よ、余は御身等が愛國の義務を盡すことを悦ぶを見て、御身等を愛するのみならず、深く御身等を敬ふ。これ喜んで其の義務を盡す人は最も尊ぶべき人なればなり。然れども余は御身等が愛國の意義と方法とにつきて、尙審かに知らんことを望む。御身等は外敵の侵略に際しては、あらゆる力を盡して之を防がんとすと言へり。これ確かに愛國中の最も義烈なる方法なり。これにつきて茲に御身等に語らざるべからざる歴史談あり。御身等は、弘安四年と言ふ軍歌を知るならん。弘安とは今より六百年前にして、我が後宇多天皇の御代にあたり、政治の責任

二 如何にして國家を愛すべきか

五

は鎌倉の執權北條時宗の手にありたりき。執權とは今日の總理大臣の如き官を言ふ。此の頃支那の北方に勇武なる一種族あり、四方を征服して、遂に支那の本部なる宋の朝廷を亡ぼして元と言ふ國を建て、勢に乗じて使者を我が國に遣し、傲慢なる國書を贈りて我が國に降服を勧めたり。

此の時北條時宗は、其の國書を以て日本の面目を傷けたるものとなし、且つ其の使者は軍事上の探偵を兼ねたるものなるが故に之を斬り、盛に軍備を修めて彼の來襲を待ちしが、果して弘安四年に至りて、十四萬人の元兵四千二百艘の戰艦に乗じて來襲し、

壹岐對馬を略取して、遂に筑前博多の津に迫りたりき。而して其の大風に遇うて全軍覆没したるは御身等の知る所ならん。少年諸子よ、此の戰は大風の爲に勝利を得たるにはあらず、關東四國九州の軍士が、北條實政・宇都宮貞綱の指揮を奉じ、六月五日より六月三十一日まで、彼等を防ぎて上陸するを得ざらしめたるによるものにして、我が國の滅亡せざりしものは、主として九州に集まりたる軍士の力によれり。とこそ云ふべけれ。我が國の歴史は、我等の祖先の血液にて書かれたるが如しと云ふは、此の類の事を指すなり。

近くは日清・日露の戦争に際して、我が將校・兵士が、敵軍の彈丸雨の如く降るをも顧みずして奮戦し、遂に最後の勝利を得、我が國家の光榮と權利とを保ちたるは、またこの祖先の遺風を學びしに外ならず。余は御身等が國難に際しては、皆此の歴史上の戰士の如くならんことを望む。

然れども愛國はこれに止まらず。戦争なき平時にありても、國を愛する法は少なきにあらず。御身等が學問修業の後、科學・工藝等に就て比類なき大發明を爲し、これによりて我が産業の上に非常なる進歩を促す事あり、もしくは御身等が學問・美術の上に於て、

大製作を出して一代の文運を進むることあらば、これまた戦争に際して身命を擲つにも劣らざる愛國の所業なり。御身等が帝國議會議員の選舉に際して、眞に此の人こそ日本の福利を圖るならんと信じたる人に投票するは、即ち愛國の所業なり。何となれば國政の進歩は之によりて見らるべければなり。御身等若し人の父として、若しくは兄として、其の子弟を學校に送りて、日本人民たるに缺くべからざる教育を受けしめなば、これ即ち愛國の所業なり。何となれば、これ國事に盡すべき人を作るものなるが故なり。少年諸子よ、御身等は力弱くして外敵と戦ふ能は

ずとて愛國心を示す能はざるを憂ふることなかれ。凡そ人民として爲すべく爲さざるべからざることあやむを爲すは、即ち愛國の端緒なるぞかし。御身等の隣家の老翁が、外敵と戦ふの力をなして、愛國心を示すこと能はずと侮る勿れ。彼は今年七十歳にして、一の乾物屋に過ぎざれども、彼が正直、勉勵の氣風によりて、近傍商人の龜鑑となりたることと、彼の財産の幾分を軍事費として政府に獻じて國家に盡したることとは、また確かに愛國の所業なるぞかし。

されば人正しく生活し、其の職分に忠實に、その力其の力を一身の外におよぼすことは、即ち愛國の第一着歩

なり。如何なる戦争上の勝利を得とも、如何に國の富を増すとも、人民が遊惰放蕩にして職分を重んぜず、自愛の心を他におよぼすにあらずんば、國の因つて立つ所の基ある事なし。勤勉忠直にして、國の基を立つるは、是の機みな愛國の所業なり。(竹越三又一三又文集)

金言(一)

有恆産者有恆心、無恆産者無恆心。(孟子)
倉廩實則知禮節、衣食足則知榮辱。(管子)

三 春の廣見

天神様の御祭に少し遅れて、お懸け所の彼岸櫻が

倉廩 倉
言 普通
倉 倉

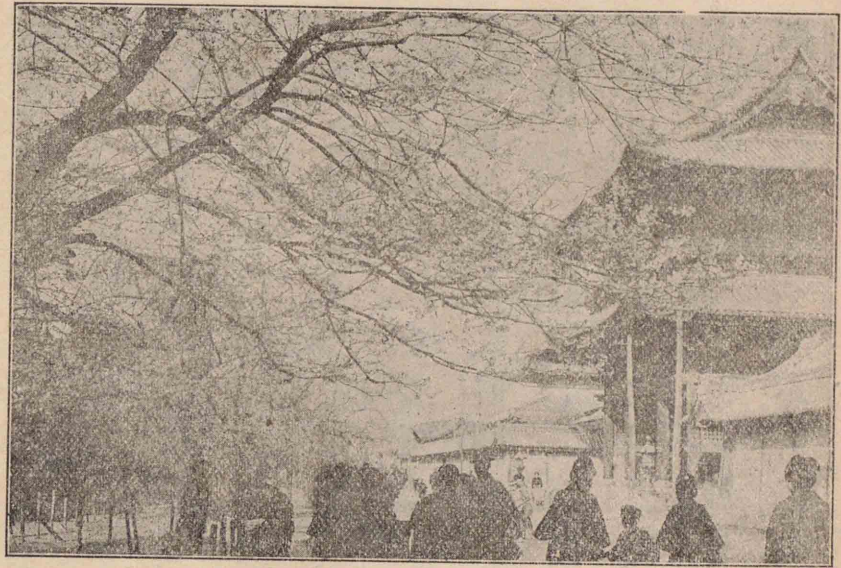
彼岸
山門
榎門
手のり

咲いた。お彼岸参りかたがた花を見る人、花見かたがたお彼岸参りする人が續いた。お懸け所近くは埃が賑やかに立つて、そこに夥しく乞食が居た。お彼岸にこの町の人は始めて郊外を見るのであつた。彼岸と郊外とは動かぬ聯想であつた。

「お懸け所の山門を出て、そこにしだれ櫻の古木が竝んで、薄赤い花をつけてゐるのを見ると、心が浮き立つた。山門の向側は、古い黒い講中會所が長屋のやうに竝んで、山門側はずつと高い白い土塀になつて居る。この狭苦しい中に櫻が咲いてゐるのだ。花下に席をとつて眺めることは許されてなかつたので、皆

眞面目な顔で花を見て通りすぎて、東裏門に出る。私は毎年一度は、花時にこの東門をくぐるのであつたが、いつもこの門に立つとはつとして、眼前の景を始めて見るものの如く新しく感じた。

ここがこの町の東端で、しかも道を隔てた向側はずつと低地になつてゐるので、廣い田圃の景色が、くつきりと鮮かに展開されて、青青とした色と水の光とがそこに錯綜してゐた。そこに人家が一村づつ、仕組繪のやうに見えた。家のある所を少し離れたあたりに、ゆつたりと枝を張つた老松があつた。遙か稍高みになつてゐる村の邊に、晒布が雪の降つた様



名古屋東院の花櫻

に見えた。そして丁度地
 平線といふあたりに濃
 い赭色の八事山が低く
 細く横はり、その上に、空
 へ描いた様に猿投山、大
 艸山などが聳えてゐた。
 この門を潜つて段を下
 り、道を横ぎつて、その道
 の東側に立つと、更に南
 北の眺が廣がる。
 この位の眺望はどこ

*横井也、俳文
 の名家。(三三三)一
 (三四)

の町の郊外にもあるといふ事を、稍長じて旅行して
 から知つた。併し全くの平地で、町の中に少しの高み
 もなく、自分達の住む町の形をも眺め得ぬ名古屋人
 にとつては、この眺は心を根柢から快活ならしめ
 て、眞に自然の色彩に驚歎せしめた。かの也翁の住
 居はこの少し東北に在つたので、翁が「知雨亭記」に、
 門を出て、東北の方、しばらく十歩の杖を曳
 けば、指頭萬疊の山横ほれ、眼下千町の田つらな
 り、村落畫圖の中に入る。南は高倉の森高く、鳴海
 の浦風も通へば、熱田瀉も名のみして、夏も夏
 知らぬ日多かり。やや賤が屋の蚊やりも細りて、

衣うつ聲蟲の音もよそよりは早き心地するは、
夜寒の里も近ければならし。

とあるのは、即ちここらの景色である。その夜寒の里の名はこのあたりの陶器に残つて、「夜寒焼」と稱してゐた。今はどうであらうか。この邊の田圃に面した藁葺の家で、それを造つてゐた。陶器の好きを父は、よく私を連れてさういふ家に這入つた。お爺おぢさんが黄いろい胸をはだけて、胡坐あぐらをかき、面白く轆轤ろくろをまはして、灰色の土の塊を色色な形に拵へて居た。

同じ也有翁が、つい近處の分平庵の主人に句を求められて、

四時の多景何れをかわきていふべき。されど
庵近きよしみもあれば、在りてつれなくいなび難く、只
眼前の姿をいふ。

繪の中に動くものあり

として、下五文字に掛けはづしの自由あり。春は田螺取とすべし、夏は早苗取、秋は木わた取、冬は大根引と置換へて見よ。一物四様にはたらきあれば、句の拙きをいふべからずと、傳授の一語にまぎらかして、贈物とはなせりけり。

と書いたのも、ここらの景色である。
「廣見」といふのが、この門前一帶の地名であつた。廣

見餅といふまい餅を賣る舊家が、この寺の南に在
 つた。その家からは眺望が出来ぬ。この餅の出店が、
 簀ばりて門の直ぐ前に出る様になつたのは、餘程後
 のことで、前にはこの邊に眺望を妨げるものは何も
 なかつた。春の日は靜かに照り匂つてゐるこの廣見の
 廣い道をお守を入れた大きな巾着を腰にぶら下げ
 て、よちよち歩いてゐた私の姿を今思ひ出すと、私は
 胸が一杯になる。(沼波瓊音)

四 西國花便り

一 吉野の花信

今年もまた吉野山へ参り候。口の千本は最早
 葉櫻となり、吉野宮の邊まで散りかかり候へど
 も、中の千本は今日が眞盛にて、如意輪堂は櫻雲
 の裏に罩められ、後醍醐天皇の山陵も、正に南朝
 天子御魂香の句の通に候。

二 熊野落

花の吉野を立出でて熊野落と洒落申候。本來
 ならば、兜巾鈴懸の山伏姿といふ所なれども、案
 内兼務の供の者一人を伴ひ、まづ柚谷峠を越え
 申候。此處は後村上天皇賀名生へ遷幸の道に候。
 黒瀧川宗川などより吉野川へ流し出す材木の

今來古往跡茫茫、
 石馬無聲坏土
 荒。春入櫻花一
 満山白、南朝天
 子御魂香。(芳野
 懷古、深川屋敷)

大和國吉野郡大
 字和田、延元以
 後吉野朝諸帝の
 皇居たりし處。

文久三年(五三三)
三條實美公等七
郷の長門落のこ
とありしに續き
て、藤本鐵石・吉
村寅太郎等君側
の森を除かんと
して、侍從中山
忠光を奉じて義
兵を擧げ、天忠
組といふ。

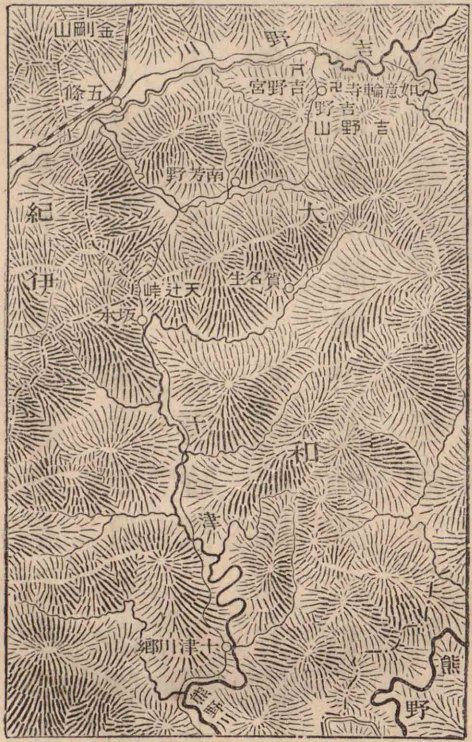
筏を、川水の少なきために、堰止めおきては一時
に決して流し下す光景、なかなかの見物に候。更
に天辻峠を越えて、山麓の阪本村に辛うじて一
戸の旅舎を見出し、四疊半の間に供の人夫と同
宿し、頻に蚤に責められをり候。襖一重を隔てて
木挽職泊りをり候。明日は十津川郷に天忠組の
勤王事跡など探り申すべく候。匆匆。

三 芳山の落花

蝶の羽風にも散出しさうに咲満ちたる中の
千本の櫻、昨夜狂風一過して、今朝は最早芳雲彩
霞も色を失ひ、小兒等が地上に狼藉たる落英を

正平三年正月(二〇〇)

後醍醐天皇御製
「都だにさびし
かやしを、雲は
れぬ吉野の奥の
五月雨のころ。」
(新葉和歌集)



拾うて空中に撒けば、時ならぬ吹雪となり、繽紛
繚亂と飛ぶ光景を見ては、かの高師直等が此處
の行宮を襲ひ、天皇の賀名生へ遷幸し給ひし跡

に火を放ち、
宮殿樓臺を
焦土と爲し
たる當時の
有様も思ひ
いだされ、哀
さ限なく候。花時尙然り。況して「都だにさびしか
りしを」と詠ぜさせ給へる吉野の奥の五月雨頃

を想像仕候ひては、泣出し度候。偶、細雨來る。

四 大和十津川の桃源境

「とんと十津川御赦免どころ、年貢いらざる作りどり」と、古來、里々俚謠りやうに歌はれ、南朝の遺臣が來り住みしより、里々徳川幕府時代にも郷士として租税を免ぜられ、今も郷民は概ね士族なる大和の十津川に參り候。東西七里、南北十三里、五十五の小部落あれど、その各部落は二里に三軒、三里に五軒といふ僻陬へきそに候。併し古來、士民皆勤王の志篤く、維新前、田舎王政復古の爲に、田舎陳勝、吳廣たりし藤本鐵石や松本奎堂が、中山忠光卿を推して義兵を

(XU) 秦末に擧兵の勢驅者たりし人。

擧げたる處。四方、山又山にて、一夫守れば萬夫も攻むるに難く候。吉野より熊野の道路、險阻ながらも溪山の勝は甚だ妙に候。(坪谷水哉)

金言(二)

溫故而知新、可以爲師矣。(論語)

人無遠慮、必有近憂。(論語)

五 巴里の五月

山羊の乳を賣りに來る男が朝早く此の町を通ります。幾頭かの山羊を引連れながら面白をかしく笛を吹いて來るので、呼留めて買はうとするものがあ

←
A三十一

れば、すぐ其の家の前で新鮮な乳を搾つて呉れるのです。今朝も私は山羊の乳賣の笛に眼を覺しました。夢のやうに寢床の中で耳を澄すと、遠い牧場の方からでも、若草を吹く五月の風がとぎれとぎれに持つて來る様な笛の音が、まだ朝のうちの玻璃窓へ傳はつて來て、何かかう、自分等の心の底に眠つて居るものを誘ひ出すやうな心地が致します。故郷で飴屋の吹いて來る唐人笛チヤンノウエを聞きますと、二度とは自分等の生涯に來ない少年時代の方へ心を誘はれるやうな氣が致しますが、この山羊の乳賣の笛の調子が、何となくあの唐人笛に似て居ります。今少し澄んだ柔か

(-)Melody.

音響の海
旋律の音
相
相
相

な音です。巴里のやうな大きな都市の空氣中にも、かうした牧歌的牧草の歌な情調を傳へる細い幽かなメロディメロが流れて居るか、と珍しく思ひました。

只今は當地でも最も楽しい時です。輝いた日光は窓の外にあります。櫻の花があわただしく散つて若葉に變つて行くやうな趣は當地には見られません。が、でも春の過ぎて行くといふ心地が私の胸に深く浮んで參ります。日に日に茂つて行くプラターナスの竝木の若葉が少し萎れて見える時、其の葉の間に日光の満ちた時、五月らしい雨が來て、柔かな新緑の活きかへる時、私はまた遠い空のかなたに、曾て信濃

(=)Plafane.

黄昏の日は霞を透して
赤い光を放ち、
空を染め、
山を照らす。
この光は、
大地を暖め、
人々を慰む。
この光は、
希望の光、
平和の光、
愛の光。

の山の上で望んだと同じやうな、白い綿のやうな暮
春の雲を見つけます。それが微風に吹かれて絶えず
形を變へるのを望みます。長い黄昏時がまたやつて
來るやうになりました。恐らくこの黄昏時は、暮れさ
うで暮れない町の空氣の紫色と共に、もつともつと
長く續くやうになるでせう。そして極短かつた冬の
日と丁度反對に、一晝夜の大部分を晝のやうに明る
くして了ふでせう。

地帯から言つて、當地が北海道あたりに近いこと
は鈴蘭の花で思ひ當ります。此の花が信濃の山の上
でも採集されるのは、矢張北海道あたりと氣候を同

*Symbole. (佛語)
(Symbol. 英語)

じくするからでせう。五月の一日には、當地の町町で、
鈴蘭の小さな花束にしたのを賣ります。それを幸福
の象徴として、胸のあたりに挿して行く男女を見掛
けます。(島崎藤村「平和の巴里」春樹)

新撰詩集「今と昔」十世悦作。

六 佛國人の節儉

人あり、突然巴里に來り遊ばんか、歡歌笑語の聲は
巷衢に充ち、晝は屋氣の樓かと疑はれ、夜は不夜の城
を開くを見ん。これを觀る者は皆おもへらく、世界の
遊惰なるものは佛國人に過ぐるはなく、天下の奢侈
なるものは佛國民に若くものをなけんと。一見誰かし

屋氣、海岸、砂漠、
水、空、
か、
わか、
わか、

二五

か感ぜざるものあらん。然れどもこれ大いなる間違なり。巴里の然るは、門戸を開放して四海萬邦の客を迎へ、財囊を傾倒せしめんが爲のみ。全體よりしていへば、佛國人は遊惰なるよりも極めて勤勉なる人民なり、奢侈なるよりも極めて節儉なる人民なり。いな寧ろ吝嗇に近き人民なり。

世人の知れるが如く、佛蘭西は世界の一大農産國なり。即ち農を以て國の本となせるの民なり。従ひて佛の強國として、富國として、世界列強の間に立てる所以のものは主として農民の力にあり。若しそれ一度巴里を出て地方に就きてこれを見んか、その農民

の耕作に勤勉なる、しかもその不撓なる、むしろ頑強とも稱すべきものあり。且つ彼等が自家の土地を愛すること、は、子の親に於けるが如きものあり。彼等は實にその土地を以て自家の親愛なる親とせるものなり。而して彼等は、常に節儉に力め、一文錢をも苟もせず。錢に錢を積み、財産を蓄ふるを以てその畢生の心願となせり。故に細農といへども多少の財産なきはなく、しかもこれを他邦に比すれば、その富力遙かに超越するものあり。佛國の富國たる基礎全くここにあり。且つこの財産を保護せんと欲し、増加せんと欲するの欲心は、即ち國民の結合力となれり。ここ

に於てか強國たるの基礎も亦多くはこの裏より來れり。ただそれかれが如く金好きの農民なり、然れどもその最も感ずべきは、國の危急に際するを視れば、都府よりも多く財を國家に捧ぐるはこの田舎にあり。都人よりも多く人物を犠牲に供するも亦この農民にありと聞く。(福本日南—現歐洲) 九洲新同社蔵、現存

金言(三)

見賢而思齊焉、見不賢而內自省也。(論語)
 邦有道貧且賤焉恥也、邦無道富且貴焉恥也。(論語)

七 捕鯨記上

明治三十九年

(二) Knot. 一哩は約十七町

(四) Launch. (三) Ton. 四百立方呎

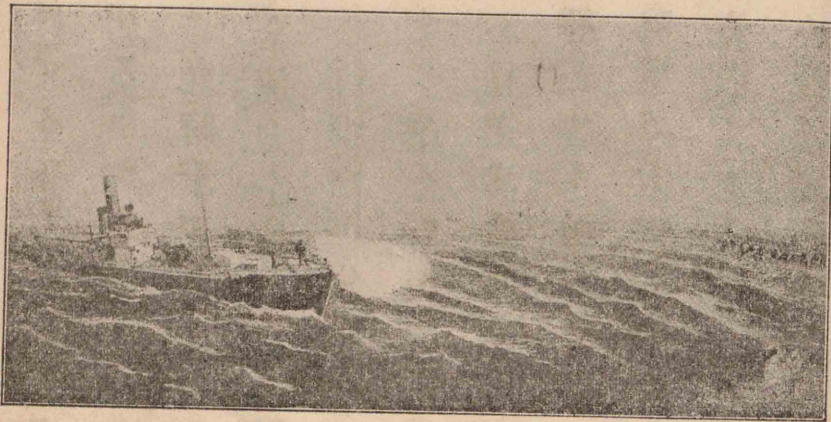
(五) Winch. 巻揚機

四月十八日午前九時、余は韓國蔚山に於て捕鯨汽船ニコライ丸に乗組んだ。やがて拔錨。船は北の方鬱陵島を指して進むこと約百三十哩。この船はもと露國の捕鯨船であつたが、明治三十七八年戦役の初に海上の偵察をした爲、我が海軍に捕獲されたのである。鋼鐵製噸數百二十、速力八節、見た所は水雷艇とラシチとの間の形であるが、誰にも目につくのは舳の捕鯨砲である。砲の中に六尺餘の鋼鐵製の銚が嵌めである。銚には徑五寸二分からの大綱が結び附けてあつて、綱の一端は五インチに巻かれて三百六十尋までは延すことが出来る。砲を撃つ、銚の先が錨の如

く開く綱がついて居るので切れぬ限は逃すことはない。鯨が弱つた所で、ウインチで巻戻すといふ仕掛。この日夕方まで鯨の影も見えぬ。夜の九時から火を消して機關の運轉をやめ、日本海の暗黒の中に船をその儘流して、船員一同眠に就いた。この風、この潮の狂ふ中に船を流して置くのか、心細いことだ。などと考へて居るうちに、何時しか疲れて、余の腦も全く運轉を止めてしまつた。

翌日眼の覺めたのは八時頃、船はもう進行して居た。昨夜十湮流されたとか、忽ち聞くボーイの聲、見えました。余は夢中で階子を走り上つて甲板に出た。と

*Norway.



見れば左舷四五十間の處で、高さ二丈ばかりも潮を噴上げて居るものがある。その壯觀、敷設水雷が爆發したかと疑はれるばかり。海水は空高くつき上つて、それが忽ち散亂するのである。見て居る間に彼は忽ち脊を隠して海中深く没してしまつた。あとは唯渺漫たる大海原、砲手の諾威人は、余のより二倍もある大きな手を砲の把手へ掛

(-) "No."

手は引金に指を掛けた。轟然とんざん一發、忽ち砲手は白煙の間に隠れ、巨鯨は白浪の裏とらに没して、船も無し、海も無し。この時檣上に聲あり、無効むこう。これは船長の報告である。白い煙が消えると、平然たる砲手の顔が再び眼にうつる。この時、船長は檣の上から飛鳥の如く降り來て、第二の銃を仕込むべき命令を傳へた。準備は出來たけれども、さきの砲聲で鯨群は逃去つたであらうと心配して向ふを見ると、どうしてどうして、鯨の群は平氣で以て彼方にも此方にも泳いで居る。これは今餌について居るので氣がつかぬのだといふ。どうしても鯨には大きい所がある。

八 捕鯨記 下

(-) "All right."

一時四十五分となつた。多くの中で一番運の悪いのが、舳しほの前面に十二三間、少し左寄りにぼつかりと浮いて、極めて暢氣つんきに潮を噴上げた。轟然一發、白煙、白波、海底に第二の爆發、これは鯨の體につき入つた銃じゆの破裂した響ださうな。船長は大聲に、「オールライト、オールライト、船員は齊しく叫んだ、「オールライト」、「オールライト」。砲手はこの一發の命中に於て多大の名譽を荷へるにも關らず、顔面に些の表情を示さず、例の如く悠然ゆたかにとして砲の傍に立つて居る。余は何時の間にか唯

一人船橋の上に残された。水夫長も水夫も皆下に降りて了つたのである。萬歳萬歳と余は絶叫したが誰も應じない。下ではそれ所ではないのであつた。

ウインチの回轉は風車の如くである。銆綱は水の迸る如くに繰りだされて居る。摩擦の爲に熱する車輪へ水を掛ける。機械の要所ちひさしな所へ油をさす。船庫に飛降りて繰出された綱の捌とぎをつける。檣から吊下げた滑車から鋼鐵索を下す準備をする。更に又第三の銆を仕込むべく迅速に仕度をする。これが皆同時であるが、さて肝腎の鯨はと見ると、何處にも見えぬ。しかし銆綱はぐんぐん海中に沈んでいく。何だか甚だ

*"Go astern."

心細くなつた。そこへ汗だらけになつた機關長が登つて来て、御覽なさい、いまは後へを掛けて居るのです。それに「徐行」位の速力で船は出て居ます。と教へてくれた。百二十噸の汽船は、今や一頭の鯨を綱引に備つて、石炭を焚かずに海洋を走つて居るのである。

二時頃、遙かに遠く手負鯨は浮上つて、それでも高く海水を噴上げた。船を引く力は少しも鈍らぬ。今銆綱は二百七十尋ばかり出て居ります。まだ九十尋は餘つて居ます。なにその内にはもう弱りますよ。と機關長は平氣。すると、もうこれで一段落ですか。と余は問うた。や、どうして、どうして、これからが大活動です。

と云ひすてて馳降つた。このときに新しく驚かされたのは海原の廣大なることである。巨鯨は紙鳶の如く小さく、銆綱は風絲の如く見えるのである。

二時十分、今まで鯨に引かれて居たニコライ丸は愈、反對に鯨を引寄せる段となつた。引始めてからは鯨の浮き沈みが急激になつて、二分時三分時毎に海水を吐くのである。それが近寄るに従つて益、繁く、後には潮と共に傷口から血を噴くのとさへよく見える。銆を打込まれたのは、人間ならば腰といふ邊である。背部の疣ホコの左方である。其處から五六尺も高く血を噴上げながら、未だ死にきらぬ鯨の喘ぎ、物がかり偉

大である、と悲惨といふ念は起りにくい。これをも壯觀の中に數へたくなる。

とどめの銆を撃込む時は來た。二時四十五分に又かの砲で撃つたが當らなかつた。三時十分の頃には血だらけの海波がそろそろ荒立つて來た。風が出たのである。三時二十分再びとどめの銆を撃つた。今度は當つたけれども、鯨はまだ死なぬ。そこで愈、捕鯨事業中の大冒険たる短艇突撃の令は下つた。左舷に吊つてある二間未滿の小短艇は忽にして下された。その勇敢なる乗組はと見ると、二水夫と船長とである。船長は手に槍の如く見える四間餘の突銆を持つて

朝鮮慶尙道にあり。慶長二年、三三三加藤清正軍と戦ふ。清正を指す。

(三) Life buoy.

短艇の艦とこに突立つて居るのである。かの蔚山ウサンの急を聞いて、槍を杖づいて立つた鬼將軍の雄姿、それを洋式で見せて居るのである。余は帽を無闇に振つて、萬歳を絶叫した。勇敢なる短艇は見る見る海中の噴火山に突進した。血煙は日光に反射して、火山の焰に異ならぬのである。忽にして短艇は鎔岩流とも見るべき巨船の胴中に乗揚げて、船體一本立となり、人はみな逆様になつた。見る者は皆冷汗をかいたのである。「あつ、あつ」と云ふ聲が、そこにもここにも響いた。沈着なる砲手までが、この時ばかりは救命浮標ケイメイウヒョウに手を掛けようとして居る。實にこの短艇突撃位危険な事業

はないのであつて、若し鯨の尾羽ビロが手平てひらかに觸れようものなら、それが最後、船體は粉碎されてしまふのである。乗組は無論跳飛ばされて、助つた所で一生の不具者カクハロ。

唯見る、艦の船長、力と頼む一本の突銛を扱いて、鯨の心臓部目懸けて突つこんだ。これと同時に鯨の體は海中に沈み入つて、絶大なる血の渦卷。短艇は山頂から谷底へ落下したやうに吸込まれた。二水夫は必死となつて權かを動かしたが、船長は未だ突銛を放さぬ。筏師が竿を泥川に突立てた様な形で、一所懸命に力を入れて、居る間に、急にそれを引抜くや否や、それ

*Hammer.

つとばかり五六間後退を命じた。退くか退かぬ間に、鯨は礁脈の如く又浮上つた。それと見るや、奮然短艇を再び乗揚げて突く。沈む、退く、浮く、突く。四回ばかり繰返される間に、六尺餘の銛の穂先柄の部は三間位は弓の様に曲つて了つたのである。

豫て用意の鐵槌（*Hammer）で、退いては打直し、打返しては又突く。この間の惡戰苦闘、實際の戰爭にもこれ程の事は稀であらう。その間に船長は「えつ、面倒なり」と思つたか、曲つた穂先を舷側に打附けて反りを返し、今しも浮上つたる鯨の手平の上を深く突刺したので、さしもの大動物も全く絶命、兩方の手平を高く立てて、

雪のごとく眞白い腹を出して、碧海に一文字。

「萬歲」は始めて船員の口に唱へられた。時に午後三時四十一分、發砲してからこの最後まで實に一時間と五十四分を費したのである。それからその鯨をウインチで引寄せて、右舷側鐵鎖で結び附けた。大方ニコライ丸の八九分まであつた。身長を測つて見ると、六十一尺、胴の周圍の最廣部が二十四尺、長鬚鯨の雄であるといふことだ。（江見水産―捕鯨船に據る）

金言（四）

仁者如射、射者正己而後發、發而不中、不怨勝己者、反求諸己而已矣。（孟子）

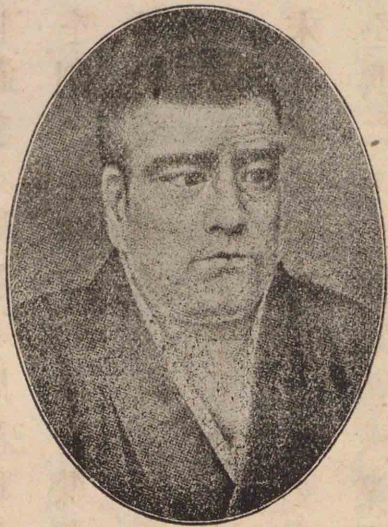
逐獸者不見太山嗜慾在外則明所蔽矣（淮南子）

九 南洲遺訓

事大小となく正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて一旦その差支を通せば、後は事宜次第工夫の出来る様に思へども、策略の煩ひ屹度生じ、事必ず敗るるものぞ。正道を以てこれを行へば、目前には迂遠なるやうなれども、さきに行けば成功は早きものなり。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして

己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。



西郷南洲

己を愛するは善からぬこと第一なり。修業の出来ぬも、事の成らぬも過を改むることの出来ぬも、功に伐りて驕慢の

道と兼て賞心存じ義徳を以て
多に決意を於ておきなむ

西郷南洲

西郷南洲

西郷南洲筆蹟

生ずるも、皆自ら愛するがためなれば、決して己を愛すまじきものなり。

過を改むるに、自ら過てりと思ひつかば、それにてよし。その事をば棄てて顧みず、直に一步踏みだすべし。過をくやくしく思ひ、取繕はんとて心配するは、茶碗を割りし時、その缺を集めて合せ見ると同じことにて、詮なき事なり。

命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業を成し遂ぐることは、望み得ざるなり。

道を行ふ者は天下舉つて毀るも足らずとせず、天下舉つて譽むるも足れりとせず。自ら信ずるの篤きが故なり。

天下後世までも信仰悦服せらるるものは、只此一箇の誠なり。古より父の仇を討ちし人、その數擧げて數へ難き中に、獨り曾我兄弟のみ、今に至るまで兒童・婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤き故なり。誠ならずして譽めらるるは、僥倖の譽なり。誠篤ければ、たとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。(西郷南洲)

*曾我十郎祐成、五郎時致、父の仇なる工藤祐經を富士の蘆野に殺す。時に建久四年(一三三)なり。

一〇 草とり

六・七・八・九の月は、農家は草と合戦するのである。天は一切のものを生じ、一切の強いものを育てる。打ちやつて置けば、比較的脆弱な五穀・蔬菜は、野草に埋没せられてしまふ。二宮尊徳の所謂「天道すべての物を生ず、制裁・補導は人間の道」で、ここに人間と草との戦鬪が開かれるのである。

老人・子供・大抵の病人はもとより、手のあるものは十能でも使ひたい程、畑の草取、田の草取に忙殺せられる。「草に攻められます」とよく農家の人達がいふ。草を退治するのではなくて、全く人間が草に攻められるのである。

るのである。

唯二段かそこらに過ぎぬ畑をもつて、百姓の眞似事をしてゐる自分でも、夏・秋は烈しく草に攻められる。起きぬけに、顔も洗はず、露蹴ちらして草を取る、日の傾いた夕陰に取る、取りきれないで日中にも取る。やつと綺麗になつたかと思ふと、最早一方では生えてゐる。草と蟲とさへなかつたら、田園の夏は本當に好いのだが、いつも愚痴をこぼしてゐる。全體、草をどいふ餘計なものが何の爲にあるのか、われは何故草取器械にならねばならぬか。草取は愚だ。打ちやつて草と作物との競争をさせて、全滅とも行くまいか

ら、残つただけを此方に貰へば濟む。かう思うても、實際眼の前に草の跋扈するを見れば、取らずには居られぬ。隣の畑が綺麗なのを見れば、此方の畑を草にして、草の種を隣に飛ばしても濟まぬ。近所の思はくや迷惑も思はねばならぬ。

そこで又勇氣をふり起して草をとる。一本、又一本、一本取れば一本減るのだ。草の種は限なくとも、取つただけは、草が減るのだ。手には畑の草を取りつつ、心には心田の草を取る。心も畑と同様で、とにかく草が生え易い。油斷をすれば、畑は草だらけである、吾等の心も草だらけである。否否、四圍の社會も動もすれば

草だらけにならうとしてゐる。吾等は世界の草の種をとり盡すことは出来ぬ。しかし打ちやつて置けば、吾等は草の中に埋没せられてしまふ。吾等は人の爲に草を取るのではない、己の爲に草を取るのだ。草の爲に草をとらず、性命の爲に草を取るのだ。敵國外患なければ、國恆に亡ぶ。で、草がなければ農家は墮落してしまふ。わが内外の草を取らなければ、吾等は終に平和の内に腐つてしまふ。

金言(五)

入則無^レ法家^ヲ拂^テ士^ヲ出^テ則無^レ敵^國外^患者^{ナリ}、國恆^レ亡^ス。然^レ後、知^ル生^ヲ於^テ憂^患而^{シテ}死^ス於^テ安^樂也^{ナリ}。(孟子)

名徳の節
徳富蘆花「蚯蚓のたは言に據る」
不如帰 思ふに記 自然と人 蚯蚓のたは言

一一 武士道と實業

余が甚だ遺憾に思ふのは、日本の精華たる武士道が、古來専ら士人社會にのみ行はれて、殖産功利に身を委ねたる商業者間に、其の氣風の甚だ乏しかつた一事である。古の商工業者は、正義廉直義俠敢爲禮讓等のことを旨としたらば、商賣は立行かぬものと考へ、彼の「武士は喰はねど高楊枝」といふが如き氣風は、商工業者にとつての禁物であつた。惟ふにこれは時勢の然らしめた所であつたらうけれども、士人に武士道が必要であつた如く、商工業者にも亦その道が

無くては叶はぬことである。商工業者に道德はいらぬなどとは甚しい間違である。蓋し封建時代に於て、武士道と殖産功利の道と相背馳するが如く解せられたのは、なほ彼の儒者が、仁と富とは並び行はれざるものの如く心得たと同一の誤謬であつて、兩者共に毫も相背馳するものでないとの理由は、今日既に世人が認容し、了解してゐる所である。

論語、里仁篇。

孔子の所謂「富與貴、是人之所欲也。不以其道得之、不處也。貧與賤、是人之所惡也。不以其道得之、不去也。」とは、これ誠に武士道の眞髓たる正義廉直義俠等に適合するものであるまいか。孔子の訓に於て、賢者が貧賤

に處して其の道を易へぬといふのは、恰も武士が戰場に臨んで敵に後を見せざるの覺悟と相似たもので、又彼の、其の道を以てするにあらざれば、假令富貴を得ることがあつても、安んじてこれに處らぬといふのは、これ亦古の武士が、其の道を以てせざれば一毫も取らなかつた意氣と、その軌を一にするものと謂つて宜しい。果して然らば富貴は聖賢も亦これを望み、貧賤は聖賢も亦これを欲しなかつたのであるが、唯、彼の人人は道義を本とし、富貴・貧賤を末とし、古の商工業者はこれを反對にしたから、遂に富貴・貧賤を本として、道義を末とするやうになつて終つたのである。誤解も亦甚しいではないか。

想ふに此の武士道は、番に儒者とか武士とかいふ側の人人に於てのみ行はるるものではなく、文明國に於ける商工業者の據りて以て立つべき道も、茲に存在することと考へる。彼の泰西の商工業者が互に箇人間の約束を尊重し、假令其の間に損害はあるとしても、一度約束した以上は、必ずこれを履行して前約に反せぬといふのは、徳義の堅固なる正義・廉直の觀念の發動に外ならぬことである。

然るに日本に於ける商工業者は、猶未だ舊來の慣習を全く脱することが出來ず、動もすれば道徳的觀

念を無視して、一時の利に趨らんとするの傾向がある。歐米人も常に日本人に此の缺點あることを非難し、商取引に於て日本人に絶対の信用を置かぬのは、我が國の商工業者に取つて非常な損失である。

凡そ人として、その處世の本旨を忘れ、非道を行つても私利私慾を充さうとしたり、或は權勢に媚び諂うても其の身の榮達を圖らうとするは、これ實に人間行爲の標準を無視したもので、斯くの如きは決して其の身、其の地位を、永遠に維持する所以の道では無い。苟も世に處し身を立てようと志すならば、其の職業の何たるを問はず、身分の如何を顧みず、終始自

力を本位として、須臾も道に背かざること、に意を專にし、然る後に自ら富み且つ榮ゆるの計を怠らずして、始めて眞に意義あり、價值ある人間の生活といふことが出来る。是に於て、武士道は移して以て直に實業道とすべきである。日本人は飽く迄大和魂の權化たる武士道を以て立たねばならぬ。商業にまれ、工業にまれ、此の心を以て心とせば、戦争に於て日本が常に世界の優位を占めつつあるが如く、商工業に於ても亦世界に雄を競ふに至るであらう。實業家は宜しく舊來の惡思想を一洗し去り、新時代の活舞臺に於て、古武士が戰場に驅馳したるが如き心掛を以て、大

いに世界に活躍しなればならぬ。余は、武士道と實業道とは何處迄も一致しなればならぬもの、又一致し得べきものであることを主張するのである。

(澠澤榮一—青淵百話)

一二 服従と獨立

世間往往、獨立の尊ぶ可きを説くものあり。吾人も固よりこれに向つて異議あらず。されど其の謂はゆる獨立てふものは、動もすれば粗暴と取違へられ、無紀律と誤解せられ、時としては、不從順の義と解せらるるに至るものあるが如し。夫れ教師の訓に違ふ生

徒を以て、獨立の氣象ありと爲し、上官の命を奉ぜざる屬官を以て、獨立の精神ありと爲し、協同の約束に背くものを以て、獨立の骨頭ありと爲す。獨立果して此の如きものならば、吾人は之を唱道するの、決して世道を裨益する所以に非ざるを信ぜずんばならず。吾人の見る所にして、大過なからんには、獨立の精神は、服従の精神と同時に存在するを得るものなり。否、竝立、竝行せざるべからざるものなり。切言すれば、服従も獨立も其の實體は一にして、唯其の觀察の方面を異にするに外ならざるなり。何となれば獨立と謂ひ、服従と謂ふも、畢竟我が意志の發表にして、獨立

の氣象中に鬱勃たるものに非ざるよりは、焉んぞ男らしき服従の徳を備ふるを得ん。

服従は卑屈に非ず。兵士が軍紀に服するは、長官の瞋を畏るるが爲に、ならず。之に反すれば、嚴罰に處せられんことを恐るるが爲に、非ず。さりとして、之に服して、以て恩賞を邀へんとするに、非ず。身一たび軍紀の下に赴く、心既に軍紀に服すべきを決したればなり。嚴しく言へば、兵士が軍紀に服するは、自己の意志に向つて服従するなり。自己即ち自己に服従するなり。釋尊の唯我獨尊の義も、決してこの外に出でざるべし。故に男らしき服従の消息は、獨立の精神を具有する人にして、始めて之を了解すべきのみ。

獨立の假面を被りて、不従順の醜を掩ふものは、徳の賊なり。而して世間、往往之を寛假するものあるは、何ぞや。若し上官の命ずる所にして、奉ずべからざるものあらば、其の道を以て之を争ふべきなり。然れども、進んで斯くの如くする能はず、退いて其の命を奉ずる能はず、面従腹非、徒に其の長官の命を沮格し、徒に其の長官を陰にて罵るが如きは、卑屈も亦甚しからずや。吾人は世の謂はゆる獨立てふものが、却て一種の外套を着けたる卑屈なるを見るを、歎ぜずんば、あらず。吾人は實に服従の美德なるを信ず。凡そ人と

人とを繋ぐには必ず服従の鐵鎖無かるべからず。命令は上より下に於ける力にして、服従は下より上に奉ずる働たるが如く思ふは、未だ服従の何物たるを解せざるものなり。服従は必ずしも之に限らざるなり。吾人は相互の約束に服従する義務あるを忘るべからず。健全なる社會の市民は必ず服従の徳を有す。自治制度の完全なる運行は、殆ど専ら此の徳の存するに歸すべし。

吾人は實に服従の美德たるを信ず。凡そ人を其の良心に繋ぎ、人を天に繋ぐもの、一に之に頼らずんばあらず。吾人は、一度我が心に斯くすべし、斯く爲さざ

るべからずと定めたるものは、必ず之に服従する義務を遂げざるべからず。

服従は決して意志の自由を妨げず。人或は曰く、服従は即ち服従にして、最早選擇の自由と相容れずと。されど服従すべしと決定するは、即ち意志の自由なり。既に軍人たるを決す、軍紀に服せざるべからざるや論なし。既に官吏たり、官紀に服せざるべからざるや論なし。既に會社員たり、既に學校生徒たり、亦各、其の服すべき紀律あるや論なし。然れども、彼等は之が爲に其の自由を失したるに非ず。彼等が選擇の自由は、其の一身の職業を定むる時に在り。されど其の後

たりとも、亦之を存せざるにはあらず。彼等は固より其の軍人たり、官吏たる時に於て、豫め決する所無かるべからず。されど彼等中途にして服従する能はざるものあらば、即ち軍紀若しくは官紀と其の良心の命令と相容れざるものあらば、彼等は何時たりとも之を抛却して、其の紀律の檢束外に立つべきのみ。

故に服従の最後は、如何なる場合に於ても自己即ち自己に服従するなり。自己即ち自己に服従す、これ獨立の眞義なり。故に曰く、服従と獨立とは、其の實體一にして、其の觀察の方面を異にしたるに過ぎずと。而して吾人は現代の我が國に於て、特に服従の美德

なることを闡明する必要を感じずんばあらず。

(徳富蘇峯)

金言(六)

道在爾而求諸遠事、在易而求諸難。人人親其親、

長其長而天下平。(孟子)

君子欲訥於言而敏於行。(論語)

一三 心眼

人に智愚賢不肖の差あるは、大抵はその事柄を觀察するに、聰慧なると然らざるとに由る。露國の諺に、「彼の人、は樹林の中を行けども薪を見ず」といへるは、

観察することゝを解せざる一種の人を指して言へるなり。

よく物を観察するは肉眼のみにあらず、大いに心眼の力による。この故に、不注意なる人の一物をも認めざる所に於て、智者は能く種種の物を認めて観察し、仔細に吟味し比較して、その眞理を發見するものなり。

ガリレオ以前の人にて、懸垂せる物體の同じ速さに動揺するを見し者は多かるべし。されどその實地に價值あることを看破せしものは、ガリレオを以て始となす。ピサに一寺院あり。一日寺院の人、軒端に

(-)Galileo.
(1564-1642)

(-)Pisa.

懸れる燈籠に油を添へしに、燈籠は揺れ動きて止まざりけり。ガリレオこの時僅かに十八歳、仔細に之を注視せしが、之によりて、遂に搖錘器を用ひて、遲速を

余年二十以後乃知己夫有繫
一國三十以後乃知有繫天下
以後乃知有繫五世界

右佐久間象山先生語

敬字中村正直

中村正直傳

計り得べしと心に想ひ起したり。これより後五十年の勞苦學習を経て、その搖錘器始めて十分に成就し

て、時限を計り天文を算するに必要なる時計とはなれり。

ガリレオオまた嘗て、和蘭の眼鏡製造者が、遠方なる物を近く見する一種の器を新に造りしを聞きければ、その理を考察して、遂に望遠鏡を創作せり。これよりして星象を明かに觀測することを得、今世天文學の基礎も立ちたるなり。

凡そ斯くの如き發明は、心を留めずして物を見る人心を用ひずして言を聞く人には、決して爲し得ざることなり。（中村正直—西國立志編）

一四 成功狂

成功狂とは、成功して而して後狂するにはあらず、成功せんと欲して狂するなり。即ち成功を急ぎ、成功を獵り、成功に熱中し、成功に逆上し、成功の途上に於て狂するなり。かくの如き人間は、いづれの國、いづれの時にも、決して珍しからず。ただ我が國の現時に於ては、特に其の甚しきを見る。これ或は時勢の然らしむる所ならんか。

元來成功とは何ぞや、金を贏くるの謂か、名を成すの謂か、社會に勢力を揮ふの謂か、世上に羽振善きの謂か。役者として舞臺に喝采を博するは、役者の成功

なるか。力士にして土豚に勝を占むるは、力士の成功なるか。吾人は成功といふものが、或目的に到達することなるを知る。既にこれを知る、故に又甲の成功は乙の成功にあらず、乙の成功は丙の成功にあらざるを知るなり。蓋し其の目的とする所同じからざればなり。或は世間よりは成功視せられて、自己には失敗と思ふこともあるべく、或は自己には成功と信じて、世間よりは失敗と思はるる事もあらん。志す所異なれば、其の樂しむ所も異ならざるを得ず。故に成功は寧ろ各箇に特有すべき情態にして、一般に當嵌むべき通則にあらず。若しみだりに他人の所謂成功なる

ものを羨み、自らこれを競はんと欲せば、此の身を千億に化すとも、なほ未だ足らざるべし。而して其の足らざるに氣附かず、強ひてこれを行はんとす、これ成功狂の成功狂たる所以にあらずや。

世間を見渡せば、古今人のいはゆる成功を説く文書、一にして足らず。これ固より懦夫を起たしむるの良薬たらずとせず。吾人はこれに對して、毫末も苦情を陳ずべき理由なし。ただこれを受用する者、特に青年に向つては頗る慎警を要するものあり。然らざれば、徒に他人の寶を數へて、自ら富めりとするの狂に陥るを免れざるべし。これ實に危険の事なり。

それ古今の成功者なるものは、其の一半は意志の力により、他の一半は偶然の力による。偶然の力とは、其の時勢なり、其の周圍なり、其の場合なり、其の境遇なり、其の機會なり。例せば、豊太閤の如き、いかに彼の雄才大略を以てすとも、もし彼をして元祿時代の旗下たらしめば、豈に彼が如き偉大なる成功を倣さんや。豊太閤の凡夫にあらざるは勿論なり。されど太閤をして日本歴史の最高峯に立たしめたる所以は、彼の箇人的勢力も固よりその要素たるに相違なけれど、そは唯一要素たるのみなるを忘るべからず。吾人が今日に於て太閤たる能はざるは、太閤が當時に於

て吾人たる能はざるが如し。 (徳富蘇峯)

金言(七)

古之善制事者、轉禍爲福。(史記)
君子求諸己、小人求諸人。(論語)

一五 山田鋤く牛山車の牛

世をはなやかに面白う
 樂しげに行く山車の牛、
 ちやんちきちきの鳴り物に
 囃さるる身も安逸はなう、
 夏の一日荷は強く、

夕陽に迎る肢重し。

翠山圍む村古りて

白雲の底雞うたふ。

晝寂寂としづかなる

田舎の瘠田鋤く牛の

歩みも緩く日を暮す。

心のどけくゆつたりと

尾をうごかすや春の風。

山田鋤く牛、山車の牛

虚榮の街のかしましき

笛鐘の音に我が耳を

にごして心疲らせて、

人の玩弄あそびとならんより、

自然にちかき山里の

松の根方の晝やすみ。

梢のかぜに罪も無き

夢を吹かせて田夫たつとと

共にまどろむ小半時。

翼つかれし蝶蝶に

角は假してもよしやよし、

ただ我が性を遂げんこそ

いつはりならぬ望なれ。(幸田露伴―心のあと)

乃木少助

一六 乃木兄弟の水盃上

乃木少佐が小倉聯隊長心得に爲つた時、弟の眞人正誼は二十二歳であつた。少年時代には、少佐よりも活潑で、少佐よりも體格が良くて、親戚からも、土地の人からも、眞人さんは立派ぢや、將來は兄さんよりもずつと豪くなるだらう。と期待されて居たが、維新の際に立後れて、官途にも就かず、學校へも入らず、相變らず養父玉本文之進の許に在つて、農業をする傍に、文武兩道を研いて居た。文之進も亦、武士にならなければ百姓になれ。といつて、強ひて眞人を官途につけ

吉田松陰の叔父なり。(三四七—三五三)

よりとも思はなかつた。

當時萩には前原一誠といふ傑物が居た。これも村田清風や玉本文之進等の先輩に仕込まれた忠孝の士で、萩の古老等は、一誠の事を訊くと、忠孝兩道の傑物、一誠の忠義孝行には誰も及ぶ者はござりません。と云つて居た。極めて自信が強く、漢學に通じ、又劍道に詳しかつた。明治維新の際には、藩命を奉じて越後に出張し、一隊の長となつて軍功があつた。それで賞典祿六百石を賜はり、越後府の判事に拜命し、續いて明治二年七月には參議となり、從四位に叙せられ、十二月には兵部大輔に轉じ、廟堂に重きを置かれた

前原一誠。(四九四—四五六)
村田清風。(四三九—四五三)

が翌年他の大官連と議論の合はぬ事があつて職を罷め、萩へ歸つて閑居した。明治八年江藤新平が佐賀の亂を起した時は、縣令中野梧一の依頼を受け、縣下の人民が動搖せぬやう、公開狀を草して縣下に示した。それが、一誠の忠誠を披瀝した古今の名文であつたから、一たび世上に傳はつて後は、名聲頓に現れ、薩摩の西郷か、長門の前原かと云ふに至つた。

一誠には政治上に不平があつた。郡縣制は彼の主義であつたけれども、目下の如く、廟堂の大官が獨斷で事を決して、少しも民意を酌量せぬやうでは、表に郡縣の制度あつて、實は封建當時の状態に異ならぬ。

この大弊害を除くには、君側の奸物を倒す外ないといふ主意で、よりより同志を集めて居た。

忠孝の權化と云はれる一誠の企であるから、土地の有力者は多くこれに加擔した。前原さんの云ふ事は必ず正義に相違なからう。と云つて、善く事情を確かめずに一味した者もあつた。文之進は一誠の先輩で、莫逆の友であつたが、叛旗を翻すことに同意はして居なかつた様に思はれる。併し文之進の門人百餘名は、その養子正誼を眞先に押立てて、一誠の企に加盟した。

正誼も元來から當時の政治に不平があつた。それ

*萬會津藩士、千葉縣廳を襲はんとして、思案橋近傍にて捕へらる。(一三三三)

て常に四方の不平黨と氣脈を通じて、政府要路の人人を倒さうと謀つて居た。江戸思案橋の暴徒長岡久茂等が叛旗を翻さうとした時にも、正誼は背後に在つて計畫に参加したとの事である。其處へ、日頃信用する一誠が、君側の奸を除くを口實にして兵を擧げる事になつたから、一も二もなく幕下に驅付けたのである。假令文之進は同意せずとも、其の嗣子たる正誼が連判に加はつたことは、前原勢に取つて何れほど重きを爲したかも知れぬ。一誠は直に正誼を參謀にした。正誼の外には一誠の弟佐瀬三郎陸軍少佐山田穎太郎を始め、横山俊彦、奥平謙輔等も居つた。中に

も山田穎太郎は小倉聯隊長であつたが、一誠が西郷隆盛に面會する爲に鹿兒島へ行つた歸途に、小倉へ立寄つて連歸つたのであつた。即ち穎太郎は無斷で



乃木希典肖像

聯隊を去つたのである。其の後任として赴任したのが乃木少佐であつた。

九州の山野は風雲益、急を告げた。久留米・福岡は、動もすると暴徒に與すべき形勢が見える。諸處の舊士族は多く明治政府の方針に不同意であつた。小倉の嚮背は西部九州に至大の關係を持つて居た。十四聯

隊を動かせば、久留米・秋月・熊本・福岡悉く爆發する模様であるので、前原一誠は熱心に乃木少佐を味方に付けようと希望した。其の使命を帯びて、遙遙小倉に出かけたのは正誼である。

一七 乃木兄弟の水盃下

「玉木正誼さんがお出になりました。」

取次に出た従卒は斯う云つて、少佐の居間に伺つた。

「眞が来たか、此方へ通せ。」

當時少佐は眞人の事を眞と云つて居た。少佐ばかりでなく、萩の人は多く玉木眞と呼ぶのであつた。

眞人は案内に従つて入つて来た。少佐は聯隊の書類を調べて居た。

「何の用で来た。」

少佐はまづ尋ねた。しかし眞人が何の爲に来たかは、大略推量して居たのである。

「御相談があつて来ました。只今東京からの歸途です。お父様も御機嫌克くいらつしやいました。お母様もお變もございませんでした。」

「相談とは何か。」

「前原先生の御命令です。兄さんの心事を承つて、秘密の御相談を願はうと思ふのです。」

*乃木兄弟の父母
當時東京に住せり。

眞人は力のある聲で答へた。

「さうか。」

と云つた儘、少佐は書類から目を放さずに居た。十分程して、

「一寸待て、公用を果した後に聽かう。」

仔細に書類を調べ終へて、次の間に立つて行つたが、程も無く元の座へ復つた。極めて用心深い少佐は、眞人が何事を話すかも知れぬと思ふ遠慮から、後の嫌疑を避ける爲、兄弟間の應答を聽かしむべく、部下の尉官を次の間に潜ばせた。前原一誠が反旗を翻さうとする形勢がある、そこへその同志たる弟の眞人

が自分の官舎を訪問したとあつては、世間からどの様な疑を受けるかも知れぬ。斯くては家名の穢となるといふので、特にこの手續に及んだものと思はれる。

「さあ、聽かう。」

と、少佐は眞人の前に坐つた。

「前原先生が此の度深く思ひ立たせられる事あつて、兄様をお招になります。兄さんに由つて軍に光輝を添へようといふ思召です。一度萩へお越し下さる事は出来ませんか。」

眞人は長い髪を捻りながら云つた。

「乃公は聯隊長ぢや、天皇陛下の軍人ぢや。その心で物を云へ。」

「前原先生の思召も、陛下にお叛きなさるお心はございませぬ。只君側に蔓る奸賊を誅伐して、國運の進歩を謀らうとの。」

「貴様、前原さんの企に同意したか。先づそれを聞かう。」

少佐の意氣は昂つて見えた。

「私は前原先生の御主意を正當と認めます。前原先生の御精神には誰一人感激せぬ者はありません。私は一命を捧げて先生の幕下に加はります。玉木

のお父様は自ら進んで身方は爲さらんでせうが、私や門人衆が前原先生のお側へ參るのをお引止にはなりません。兄さんも覺悟して下さい。兄さんは正義に強いお方です。一人の弟を見殺しになさる事はないでせう。玉木のお父様とは莫逆の間柄である前原先生を、猛火の中へお捨てなさる事はないでせう。」

眞人はこんな意味で熱心に説きたてた。少佐は黙つて聞いて居たが、

「乃木家は神聖ぢや。前原さんの企は叛逆ぢや。叛逆に大義名分はない。」

「兄さんはお身方をなさらんのですか。」

「私は陸軍歩兵少佐ぢや。陛下の軍人ぢや。聯隊旗を守護する聯隊長ぢや。これを見い、ここに聯隊旗がある。これに軍人の精神が籠つて居る。聯隊旗授與の際には、之を以て國家を守護せよとの御誼が下がる。如何なる事情があつても、叛逆に與すること
が國家守護の大精神に添はうとは思はぬ。」

少佐は重重しう答へた。實に軍旗の重んずべき事は、總ての場合に陛下及び軍旗と併び稱せられることにても知られる。乃木少佐はその神聖な聯隊旗の前に於て弟の眞人を説諭するのであつた。

「併し兄さん、政治の中心が腐れては、軍旗の神聖を保護する事も出来ません。前原先生の企は叛逆ではないのです。國家の爲に君側の奸を除き、死を以て忠義の精神を貫かうと爲さるのです。」

王外百兵征騎虜中我
攻城屍作山塊我何顏
我父老凱歌今日衆人
還

辛巳年

乃木希典筆蹟

「乃公は軍人だ。陛下の御命令に由る外一寸も動かぬ。誰の言ふことも聞かぬ。」

この議論は容易に決しなかつた。午前十一時頃から始まつて午後三時頃に終つた。次の間には、少佐

の命を受けた部下の尉官が固唾を飲んで聞いて居る。眞人は前原一誠のために生命を捨てると云ひ、乃木少佐は飽くまでも軍人として奉公の忠を盡すと云ひ、兩兩相持して下らぬ結果、一時は刺違へて死ぬやうな事がありはせぬかとまで危まれた。

その中に少佐の聲で、

「ぢや立派に死ぬ。」

と云つた。つづいて眞人が慄へ聲で答へた。

「見事に死にます。假令賊名は受けても、一旦の約束を反古にする事は出来ません。」

「乃公は軍人として勤むべき事を勤める。するとこ

れが永別ぢや。」

「再びお目に掛りません。先生の御命令に由る外は、二度と小倉の地を踏みません。」

眞人は暫くして云つた。

「諾し、さらばこれが兄弟一世の別だ。永別の盃をしよう。」

少佐は手を叩いて酒肴を命じた。老僕が乾鯛に酒を添へて持つて來た。少佐それを見て、

「酒ぢや可けん、水を持て。」

兄弟永別の盃は氷よりも冷たい水であつたけれど、その水の底には燃ゆるやうに温い愛情が籠つて

居た。水盃を終つて後、少佐は真人の爲に薫の好い酒を調へた。生のままの乾鰯は此の淋しく勇ましい別を飾る下物であつた。

「夫ぢやこれでお別れします。」

真人は言切つて立上つた。

「しつかり遣れ、立派に死ぬ。」

これが一人の弟を送る少佐の餞別であつた。

「兄さんもしつかりお遣りなさい。勝利は必ず官軍にあると定まつちや居ません。」

真人は悄悄と出て行つた。少佐はその後姿の見えぬやうになるまで見送つた。さうして直に陸軍省へ

電報を發した。それは前原一誠が急に反旗を翻す旨を報告するためであつた。

此の時の少佐の心、あはれ此の時の少佐の心。

(碧瑠璃園—實乃木大將)

金言(八)

君子^レ喻^レ於^レ義、小人^レ喻^レ於^レ利。(論語)

豹^レ死^レ留^レ皮、人^レ死^レ留^レ名。(王彦章)

一八 死して惜しまるる人となれ

生れて而して長じ、長じて而して死す。禽獸かくの如く、草木かくの如く、人類亦かくの如し。されば人と

して禽獸・草木と異ならんと欲せば、生れがひある人とならん事を要す。予は更に前途有爲の諸子に向つて、死して擧國の悼惜を受くる人たらん事を望む。

人生れて呱呱の聲を發するより、長じて一箇の成人となり、自營・自活して世に立つに至るまで、他より受くる所の恩徳一ならず。これを近くして、まづ父母の鴻恩あり。我等の生るるや、自營の道を知らず、自活の道を知らず、ただ泣くことを知り、笑ふことを知るのみ。此の間、晝夜を問はず、寒暑を論ぜず、心身の疲勞を忘れ、千辛萬苦以て我等を保育し、以て我が生長を遂げしむるものは、是、我等の父母にあらずや。

之に次ぐに師長の恩あり。我等が纔かに黑白を辨ずる頃より、長じて社會に出づるに至るまで、我に誨ふるに事理を以てし、我に説くに道德を以てし、必要なる學術上の知識を授け、身體保全の法を講ぜしめ、我をして將來世間に獨立する基礎を成さしむるものは、我が師長にあらずや。

更に又至尊及び國家に對する恩あり。至尊は仁慈なる大御心を以て臣民を愛撫し、宏大なる御靈徳を以て國家を統治し給ひ、國家各種の機關は生民の安寧を維持し、その福祉を増進し、兇惡を正し、不逞を罰し、以て我が父母・師長をして我等に對する慈愛・薰陶

理想
理想
理想

の務を完うせしめ、又我等をして危難を憂へずして安全なる發育を遂ぐるを得しむ。若し國家にしてその務をなさずんば、生民、亂離塗炭の苦に陥りて、我等は遂に安全なる發育を遂ぐるに由なけん。我等の安全なる發育を遂げて一箇の成人となるは、實にこれ等數者の恩あるに由る。然らば則ち我等が成人の後に於てこれ等數者に酬ゆるは、人間當然の義務にあらずや。

然れども人間の生涯は實に區區たり。或はその修養の時期に當りて懶惰遊蕩の間に貴重なる光陰を送り、體軀既に長じて、當に自營自活以てわが生育の

恩に報ゆべき時に至るも、無爲無能その父母の恩に報ゆること能はず、その師長の恩に酬ゆること能はざる者あり、況や國家が生を成す所以に對ふることをや。朝に起きて而して食ひ、夕に食うて而して眠る。かくの如くにして老い、かくの如くにして死す。これ所謂醉生夢死する者にして、實に國家の蠹賊、人間の最下なるものなり。

又その無能かくまで甚しきに至らず、何らか一種の事に従ひ、國家に對して多少の裨益をなし、以て自活の道を求め、纔かに父母を養ひ、自ら衣食して一生を送る者は、之を前の醉生夢死する者に比すれば勝

ること萬萬なりと雖も、かくの如きは纔かに自ら受くる所の恩に酬ゆるに過ぎずして、その一生の經營事業の永く後世に徳し、其の流風遺韻の遠く子孫を動かすに足るものなし。かくの如きは當に我等の理想とすべき所にあらず。

我等は人間天賦の能力を善養し、利用し、その畢生の事業は以て我等が父母・師長・國家・社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て、更に餘裕の綽綽たるものあり、後世子孫をして永くその餘澤を受けしめ、國家は我等を得て一段の進歩をなしたることを長へに追憶せしめんことを期すべし。我等が前途有爲の少壯諸子に

經營
一は、計畫
事業、子孫に
リット

待つ所のものは、實に是に外ならず。

それ生きて一郷の爲に功ある者は死して一郷の爲に惜しまれ、一郡の爲に盡せる者は一郡の爲に哀しまる。若しそれ、その事業、國家全體の進歩を助成し、その忠誠、よく闔國民に認めらるるものに至りては、その取る所の何の道たるを問はず、その人の存否は直接・間接に國家の進運に關すること甚だ大いなるものあり。是を以て、其の人一たび逝くや、國を擧げて之を惜しまざるはなし。嗚呼、天下の廣き、逝く者は日夜にこれあり、而してその死の天下に知らるるもの果して幾人かある。

少壯の諸子よ。諸子の前途は遼遠なり。遼遠なりと雖も、一生の覺悟は即ち今日より定め置かざるべからず。知らず、諸子は死して人に顧みられざる人とならんとするか、抑、一郷一郡の爲に惜しまるる人とならんとするか、抑、亦舉國の悼惜を受くる士とならんと欲するか。(嘉納治五郎—國士)

一九 學窓より

御手紙拜見いたし候。家計不如意の御事情委細拜承、併せて私の勉學についての御教訓、深く肝に銘じ候。世には新聞を賣り、車を引きて、苦學

する者すらあるを思ひ候へば、毎月少なからぬ學資を頂きて、何の苦勞もなく勉學致し得る私の身の上は、眞に幸福なる次第に候。しかもそれが豊かならざる家計の中より、一方ならぬ御苦心によりて御送り下さると知りては、實に何ともいへぬ勿體なさ、ありがたさを感じ、今更のやうに御高恩の大いなるに泣かざるを得ず候。近き頃より學期試験始まり候。今度こそはどうかして、もと、かねて存じをり候ひし處へ、御手紙を拜し、御教訓を拜し候うて、一層奮發の心を起し候。どうでも一番の成績を得ざればやまぬ覺

悟に候。御高恩に報ずるの道唯これのみに候。何卒、成績發表の折をお待ち下されたく候。

氣候殊に不順、ひとへに御自愛の程を祈り上げ候。頓首。(友田宜剛の文による)

金言(九)

人常咬得菜根、則百事可做。(小學)
士志道而恥惡衣惡食者、未足與議也。(論語)

二〇 讀書

常に良き著述に親しむものは、只獨り居れども寂しきことも覺えず。師を求めざれども日に月に學ぶ

*Cicero.
(B.C.106-43)

所あり。失意にも慰み、不平憂悶もこれを忘る。書は少年の滋味にして、老年の娛樂なり。順境には心の飾ともなり、逆境には庇護と慰諭とを與ふ。外に出でたる時も邪魔とはならず、家に在れば心を樂しましむ。夜の伴、旅の伴、僻地の伴と羅馬の名士シセロの言ひたるも同じ心なり。されど、かくの如きは人の讀書より受くる最大の利益にはあらず。

諺に、百聞一見に如かず。といへるは、何事もその身親しく經驗するに如かずといふ意味なれど、人の壽命限あれば、七十八十まで生きたりとも、目に視、耳に聽く事は幾何もあるべからず。我が日本國內の山水

(一) Lambique.

葡萄牙語。

風俗だけにて、一生には觀察し盡さるまじきを思ひ、天地の大きいなるを思ひ、時の窮なきを思へば、人間一身の經驗狭く、淺く、小さく、且つ少なかるべきは言ふにも及ばぬことなり。さればこそ、今も昔も、苟も事物の眞の理を知らんと欲し、事物の眞の相を看んと欲する人人は、一方には見聞を勵み、經驗を努むると共に、他方には廣く内外古今の名著を得てこれに親しまんことを願ふなれ。所謂名著は、人間世界開けてこのかた、およそ三千年間に出でたる大賢高德碩學^{大賢高德碩學}、大才の經驗・觀察・思索・想像をそのままに、又はランビキ^{ランビキ}にかけて傳へたるものなり。或は顯微鏡・望遠鏡に

(二) Petrarca.
(1304—1374)

譬ふるも可なり。固より人工に成りたるものなれども、人をして肉眼にて看得ざる微なるものをも、遠く且つ大なるものをも看取せしむ。後れて生れたる者にして、良書の助を借ることなく、只その貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界の事も人間界の事も僅かに一斑を窺ふに過ぎざるべく、その一斑さへも、正しく明かには看得ざるべきが常なり。要するに書は知識の寶庫にして、かねて智を研く砥石なり。しかしながら讀書の用は、尙是に盡きたるにあらず。

伊太利の詩人ペトラルカは曰く、予に良友あり。彼等は皆名士・大家にして、何れも偉業を成したる者な

(-)Channing.
(1780-1842)

り。予若しその助を藉らんとすれば、彼等は喜んで我が請を容る」と。これ良書が常にその讀者を啓發し、誨導し、鼓舞し、獎勵する力あるをいへるなり。北米の名士チャンニングも曰く、吾人が傑出せる心と相語ることを得るは、主として書籍の媒介に因る。而してかかる價知らぬ交際の手段は、衆人の自在に用ひ得る所なり。最良の書に在りては、俊傑吾人に對ひて語り、その最も貴き思想を吾人に與へ、且つその心靈を吾人の爲に吐露す」と。英國の詩人ミルトンも亦曰く、良書は、保存・踏襲して後世に傳へたる、俊傑が貴重なる生血なり」と。

(=)Milton.
(1608-1674)

人は良書に親しみて、まづ我が卑小なるを知るなり。次には或は他の識見の大いなるに驚き、或は品性の高きに感じ、嗚呼、同じく人といふ、高く、清く、美しく、偉なることかくの如きものもあるか」と歎ずるなり。若しかりそめにもその偉なるもの、美しきもの、清きもの、高きものに私淑し、これに倣はんとする志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、書用の極まれるにちかしといふべし。(坪内逍遙—中學修身訓)

二一 ことば

奇なるものは「ことば」なり。茶碗とは茶事に用ふる

碗の義にて、日本にて未だ良き陶器の出來ざりし頃、舶來の陶器は茶事にのみ用ひしより、かかる名を負ほせたるを、今は茶を呑むものを殊更に茶呑茶碗などいふも可笑しからずや。珈琲茶碗などの名も奇しき限りなり。

湯呑は湯を呑む器なるに、酒呑は盃のことにはあらで、酒を呑む人間なり。太刀持は太刀を持ちて主人に従ふに、太刀執は太刀を抜きて罪人の首をはぬ。蠅取蜘蛛は蠅を殺せど、火取蟲は火に殺さる。

金持は自分の金を持ち、袋持は他人の財袋のみかづくらんを、弓執は自分の弓を執つて人間の櫻木と

謠はれ、草履執は他人の草履を搦む。理窟のなきは、ことばなり。

「ちやまが」かたらなどいへば、片言とて誰も笑へど、正しき語にもこの類あり。古は「あらたし」といひしを、今は「あたらし」といひ、いとほし」といふ語も、元祿頃には常に「いとほ様や」などいへり。大つもごりの「つもごり」も、古は「つごもり」なりけり。

「なりけり」の「けり」を現在にも用ふることありといへば、初學者は異様にも感ずべけれど、今の口語にも、失せしものを探し當てし時に、「ここにあつた」と過去にいふは、實は、今現に有ることなりけり。

「あるけれど」の「けれど」は「美しけれど」の「けれど」にして、形容詞の語尾を動詞に續けたるなり。さるにても「ありけれど」は過去にして、「あるけれど」は現在なるも、奇なりといへば奇なり。

(二) まきもくの檜原
もいまだくもら
ねば、小松が原
に淡露ぞふる。
(新古今集、大伴
家持)
「まきもくの檜原もいまだ曇らねば」は「曇らぬに」の義にて、「ゆゑに」といふ語も、萬葉集などには「なるもの」の義に屢用ひたり。されば同じ語も全く正反對なる意味をさへ表すことあり。かへすがへすも奇なるものは人間の「ことば」なりけり。

二二 蜀山人の盆燈籠

(三) 二四六四。

文化元年の頃とか、小石川陸尺町に庄助と呼ぶ男住めり。日傭又はかつぎ商ひなどして世を渡りしが、七月十二日の朝、小石川壽經寺の門前に立つ草市へ、行燈燈籠といふものを持行きて賣りけるに、如何にしけるにや、買ふ者更になく、賣れしはわづか十ばかり、残りしは多ければ、力を落し、情なき顔してかつぎ歸りしが、太田南畝翁方へは常出入る者ゆゑ、歸りがけに立寄りて、臺所の者に向ひ、偕偕困る事かな、この盆はいかにして過し申さん。今朝の市にこれほど燈籠賣れ残り候。この分にては、明朝神樂阪の市に持行き候とも、また今朝の如くなるべし。もとより手細

(三) 名は覃、蜀山人、
又は四方赤良、
寢惚先生といふ。
狂歌狂文を以て
名あり。(1802—
1814)

顛サレ、あごあごと

工にせしことにはあれど、聊か資本もかかりたり。この分にては水も吞まれ申さず」とかこちけり。

南畝翁は座敷にて之を聞かれ、手に持つ盃を下に置きて、かの聲は庄助にあらずや。何事を申すにや」と問はるるにぞ、傍の者、斯様斯様にて、又かの泣き男がかこち申候。と云ひければ、翁は臺所に出られ、さても氣の毒な事よ、顛の下が乾きては誰も難義ならん。わが云ふ如くせば、少しは賣れる事もあるべし」と云はれければ、それは有難き事に候。いかに致すべきにや」と、翁の顔をいかにも有難氣に仰ぎ見て問ふに、翁は白紙五帖ばかり取出し、これにてその燈籠を張替へ

よ。われそれに何か書きてやらん」といはる。悦びて立歸りしが、忽に百ばかり張替へて持てきたれば、翁は例の草書にて、狂歌やら發句やら書きなぐりて渡されしに、庄助は頭を搔きつつ一禮を述べて、荷ひ歸りながら、蓮の花を紅入りにて書いてさへ賣れぬに、いかに先生なればとて、かかる冗書ムカシの反古張にては買人はあるまじ。さりながらあれ程に仰せられし事なれば、先づ明朝、神樂阪の市に持行き、賣れ残りたらば、その事を申して歎きつき、二百疋も借りて外商ひの資手とせん」と、工面顔にて足も重く、二三町歩む向より、侍一人來かかりしが、供の者に云付けて、その燈

*二百疋は金二分
即ち一兩の二分
の一なり。

籠は賣物か。と問ふ。儲はと悦び、いかにも賣物に候。やうやう傳を求めて先生に書いてお貰ひ申したるにて、心あても有りて拵へ候なれども、このやうには入り申さず候。お望ならば差上げ申さん。と云ふに、價はいか程ぞ。と問ふ。幾許と云ひてよき事やら。庄助はたと行詰りしが、思ひ切つて五十文と云ふ。その直にて二つ呉れよ。と百文渡して買行きたり。又後より通りかかりし人、それ賣るならば買ひたし。と云ふ。今度は息を一杯に吹きて、六十四文と云ふに、いふがまま

蜀山人

蜀山人

太田南畝筆

に又買行きたり。跡より又、此方へも二つ、我にも一つと、己が家に歸る迄に二十ばかりも賣りて、凡そ一貫二百文骨折らずに取り、かくと女房に話せば、誠に寢惚様は生佛様なり、有難き事なり、明日は早くより持出て給へ、私も参りて手傳ひ申さん。一人にては手も足るまじ。一つ盗まれても五十と百の損なり。と女の智惠の慾が先。夫婦はにこにこ、七つ起きして神樂阪に行き、竝ぶる間もなく、蜀山人の書いたる燈籠とは珍し。と立ちどまりて價を問ふ。庄助思ひ切つて百文と云へば、さもあるべきぞ。と百文にて買行く。女房夫の袖を引き、百にても直切らずに大勢買つて行かる

錢と金との比價は時代によりて昂低あり、當時一兩に錢六貫三四百文なりしなり。

るからは、二百文といふとも賣れ申さん、二百と云ひ給へ。」と、又智慧をつくるに、庄助額に手を加へつつ、「二百は餘り高かるべし、さらば百五十文」と云ふ。それより百五十にて六七十賣り、つひには先見明かなるその妻の言の如く、「二百文より一文も引かず」と肩を怒らし、まだ五つ半にもならぬに賣り切れたり。錢二十貫程、金にして三兩ばかりになりし故、夫婦こけつ轉びつ翁の宅に來り、亭主を搔きのけて女房罷り出で、「有難い。」を數千遍のべて、いかにも先生は生神様なり。」と、今度は神あしらひにしつつ悦び歸りしとぞ。翁が醉餘の戲、よく枯骨に膏すといふべし。(又 養庭筆村雀躍)

二三 洋學の由來

二三七六一二三九五。

二四一一一二四二三。二四二四一二四三一。

洋學の由來を尋ぬるに、昔享保三のころ、長崎の譯官某等和蘭貿易の便を計り、その國の書を讀習はんことを請ひて、その許可を得たり。これ即ちわが邦の人が横行の文字を學べる始なり。その後寶曆三、明和四の頃、青木昆陽、命を奉じてその學を唱へ、又前野蘭化、桂川甫周、杉田鷗齋等起りて、和蘭の學に志し、相與に切磋して各得る所あり。されど尙この學の始なれば、書籍甚だ乏しく、師友もなければ、遠く長崎の譯官に就きて、その疑を質し、偶和蘭人に會へば、その教を請へり。か

切確、收、と、と、折、り、修、卷、の、意、を、記、す、所、也。



前野蘭化



宇田玄白

く不便なりしかど、この人
 人いづれも英邁の士にし
 て、只管草創の業に身を委
 ね、日夜研精して、寢食を忘
 るるに至れり、或は傳ふ、蘭
 化長崎に往きて和蘭語七
 百餘言を學び得たりと。こ
 れに由りても古人が力を
 用ふるの切なりしと、修學
 の難かりしとを察すべし。
 その後大槻玄澤、宇田川

二四九〇—二五〇三
 二五〇四—二五〇七

嘉永六年(五三)ペルリ来る。

槐園等繼いで起り、降りて天保弘化の際に至り、宇田川、榛齋父子、坪井信道、箕作阮甫、杉田成卿兄弟、及び緒方洪庵等輩出せり。この時は讀書譯文の法漸く開け、諸家翻譯の書續いて世に出でたれど、概ね和蘭の醫籍に止まり、旁ら窮理天文、地理、化學等の數科に及べるのみ。故に當時この學を稱して蘭學と云へり。蓋しこの時と雖も、通商の事、支那の外は、和蘭一國に限り、來舶の地も只西陲の長崎のみなれば、尙書籍の乏しかりしは論なく、總て修學の道甚だ便ならざりき。然るに嘉永の末、アメリカ人が渡來せし後、これと和親貿易の約を結び、又好を英、佛、露等の諸國に通ぜ

漸ヒトゲキヒタス

しよりわが邦の形勢終に一變し世の士君子皆かの國の事情に通ずるの要務たるを知れり因りて百般の學科一時に興り先達の士各その學を唱へ生徒を教へここに至りて始めて洋學の名起れり。顧ふに一事の將に開けんとするや進むに必ず漸を以てす譬へば樓閣に登るに階級あるが如し即ち天保弘化の際蘭學の行はれしは寶曆明和の諸士その初階をなし方今洋學の隆盛なるは各國の通好に因れりと雖も實に天保弘化の諸家その次階をなせるなり。(慶應義塾五十年史)

二四 黄色人種の自覺

三十七八年戦役は我も人も思ひ掛なき大影響を世界に來し且つ來さんとするなり。大影響とは世界の黄白二大人種の間、平等を齎す傾向是なり。

換言すれば世界の優等人種として自負したりし白哲人種に向つて劣等人種として侮蔑せられたる黄色人種が從來の隔絶したる權衡を恢復せんとする運動是なり。是實に二十世紀に於ける世界の大現象にして假令三十七八年戦役が其の唯一の原因たらずとも主要なる動機たりしには相違なきが如し。從來、白哲人種は自ら上天の選民たるが如き意識

權衡ケンペウ 釣合

- (一) Turkey (Turk).
- (二) Egypt.
- (三) Persia.
- (四) Siam.

きを望むよりも、寧ろ黄人の自覺に驚異せざるを得ず。白人が黄人を對等視すると否とは暫く措き、黄人が白人を對等視し、此と同時に對等的待遇を彼等に要望し、もしくは要望せんとするの徴候は、歴歴として即今に續出する事實にして、土耳其、埃及、波斯、暹羅、いづれも多少の刺激を被らざるなし。就中注意すべきは支那人の自覺是なり。

支那人は、従來自ら中國人を以て居り、他の人種を蠻夷視したるに拘らず、所謂蠻夷たる白人より非常なる虐待を被りても、殆ど意に介する所なきもの如くなりき。今や然らず、彼も人なり、我も人なりとの

觀念は、殆ど支那全國に普及し、單に新問題に關して對等の地位を占めんと欲するのみならず、從來設定したる事柄にも、出來得るかぎり其の平衡を恢復せんと企つるものに似たり。政策としての得失は、吾人が今茲に問ふ所にあらず。然れども其の平等的自覺心は、決して看過す可からざる現象とす。

我が國は、黄人に斯かる活動を有意的に教唆したるの責に任ずる能はず。されど彼等の多くは我が風を見て興り、若しくは興らんとするものなり。

如何に言逃れんとすとも、日本帝國の先例は、總ての有色人種、特に黄色人種の自覺の動機となりし事

實は抹殺す可からず。果して然らば、吾人は寧ろ男らしく此の人種競争の一大渦中に飛込み、此の大勢を利導するに若かず。黃人の重荷は我が大和民族の雙肩に在り。吾人豈に小成に安んず可けんや。日本國民の事業、ここに於てか遠し。(徳富蘇峯)

金言(一〇)

知人者智、自知者明。勝人者有力、自勝者強。(老子)
天下有道、小德役大德、小賢役大賢。天下無道、小役大、大弱役強、斯二者天也。順天者存、逆天者亡。(孟子)

改訂新撰實業讀本卷三終

大正六年一月十三日印刷
大正六年一月十七日發行

改訂新撰實業讀本(全八册)
定價各金貳拾八錢
大正九年度臨時定價各金四拾八錢

著者 佐々政一
東京市小石川區大塚窪町八番地

發行者 株式會社明治書院
取締役社長 三樹一平
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 島連太郎
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 三秀舍
東京市神田區美土代町二丁目一番地

發行所

東京市神田區錦町一丁目十番地
振替貯金口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

電話神田二三九八番



正徳三年
業寫校

広島大学図書
2000081509
